



えています。とはいえ、異なる部族の人々がビーズや極楽鳥の羽で着飾り、顔にカラフルな化粧を施してエネルギーに歌い踊り、その独自の華やかさ、美しさには必見の価値があります。部族ごとに衣装や装飾品が違い、踊りも違うため、歌いながら行進する人々、太鼓を叩きながら踊る人々、鈴を鳴らしながら歌う人々、念仏のように唸っている人々など、様々なグループのパフォーマンスが見られます。

まずは、セピック川流域の村々を訪ねるセピック川クルーズへ。日本(関西空港)からパプアニューギニアの首都ポートモレスビーまでは、ニューギニア航空の直行便で約6時間のフライト。到着後、航空機を乗り換えて西ハイランド州の州都マウントハーゲンへ向かい、そこからはセスナ機でセピック川中流域の支流カラワリ川上流にあるカラワリへ行きました。やはりパプアニューギニアを代表するところといえば、セピック川でしょう。ニューギニア島北東部を流れるセピック川は全長千km以上にもおよぶ大河ですが、それにもまして、この流域で興味を引くものといえばやはり流域に住むいろいろな部族のそれぞれに違った伝統文化と風習です。

翌日からカラワリを拠点にしてセピック川の雄大な流れに身を任せ、ジャングルのなかで贅沢な時間を過ごすカヌーサファリを開始。セピ

ック川流域はパプアニューギニアのなかでも秘境中の秘境といわれ、数多くの村々が点在しています。キリスト教がすみずみまで普及している現在でも、それとは別に古来の宗教を保ち続けています。その中心となるのがハウスタンバラン(精霊の家)で、柱や棟、梁などいたる所に精巧な彫刻が施され、内部には仮面や楽器、神々



原始美術の中心をなすハウスタンバラン(精霊の家)



セピック川沿いの村



川沿いの民族のお出迎え



河の民の「シンシン」



サゴヤシからのデンプンを調理するお母さん

の像などが安置されており、原始美術(プリミティブ・アート)の宝庫になっています。船外機付きのカヌーでクルーズしながら、川沿いの村々を訪問し、パプアニューギニアを代表する文化財建築物ハウスタンバランや高床式住居を目にし、昔ながらの人々の生活の様子やハウスタンバランなどの精霊信仰に基づく独特の文化

を見学しました。

訪れた村々で、「シンシン」と呼ばれる踊りを見たり、サゴヤシから取ったデンプンを焼いてパンのようにしたものを食べたり、木筒のペニスサックをお土産にももらったりと、私達一行は流域に住む人々とのふれあいを楽しみました。上流に溯ったアンブンティ周辺の村では、先祖



ワニを守り神とする部族の成人の儀式

の頭蓋骨に粘土を付けて顔を復元させたものを大切に奉っていました。そして、何といたっても私達を驚かせたのは、中流域のバグイから下ったあたりの村で行われている成人の儀式です。この部族では、古来より部族の祖先はワニであると考えており、ワニを守り神としているので、背中に二枚刃で平行に傷をつけてケロイド状にし、ワニの背中のような模様を背中一面につけるのです。それにしてもこの模様、なみの刺青などというものではありません。肌に傷をつけその傷を残すためにわざと引きつらせているの



背中に作成中の“ワニの背中のような模様”

です。ですから、この時の苦痛を考えると鳥肌のたつ思いです。この度は訪問しませんでした。さらに上流に行ったメノウ周辺の部族では、大事な子孫をやどす女性のお腹を守るために、女性のお腹に神聖な模様を描くことで生まれてくる子供の魔除けができると考えており、女性のお腹に傷をつけて様々な模様を描いているそうです。

セスナ機にて次なる訪問地、南ハイランド州の溪谷タリへ。ハイランド地方の山岳地帯に住む部族たちはどれもカラフルにフェイスペインティングを施し、頭には草木や極楽鳥の羽飾り



鮮やかな民族衣装を着た高地の民



南ハイランド地方タリのフリ族の村

をつけています。タリの空港に着くと誰もが「とうとう来たな」と思うに違いありません。祭りでもないのに派手な化粧で頭に羽飾りをつけ、村のマーケットにはちゃんと服だって売っているのに腰ミノ姿で歩き、なかには弓矢を持って買い物に来ている輩を目の当たりにして、「21世紀を迎えようというこの時代に、何でこんな奴らがいるんだ！」のひと言が。

タリでは、20世紀最後に発見された部族のひとつで、南ハイランドの顔でありパプアニューギニアの顔でもあるフリ族の村を訪ねました。彼らは、頭には自前のかつらをかぶり、顔は赤や黄色の鮮やかな原色を使い、まるで自らをパプアニューギニアの国鳥である極楽鳥のごとくに華やかに飾り立っています。昼食は、バナナの皮で鶏肉や野菜などをくるみ、土に埋め、その上で焚き火をして蒸し焼きにした彼らの歓迎ディナー(その日の「正餐」)をご馳走になりました。



フリ族の村長夫妻



高地の民の「シンシン」

タリ族をはじめ、ハイランド地方の部族の「シンシン」は、男達が色とりどりの極楽鳥の羽飾りをつけ、顔には鮮やかな赤、黄、白の色で芸術的な模様を描きます。このような格好は空港からさんざん見てきましたが、笛と太鼓のリズムに合わせて飛び跳ねる戦いの踊りを見て、あらためて原始を目覚めさせるすばらしい太鼓のリズムと肉体の躍動美に魅了させられてしまいました。

極楽鳥は、ハイランド地方に多く棲息しており、真っ赤なもの、真っ青なものなど、目に鮮やかな色合いのものが多く見られます。さらに、蝶類もこの島独自の固有種が多く、蘭に至っては今現在知られている三分の二がパプアニューギニアが原産です。ここには、まだまだ手つかずの大自然が当たり前のように残っており、彼らは熱帯雨林のジャングルを、可憐に咲く蘭の花を、密林の中で華麗にその色を競い合っている極楽鳥や蝶を見、そして共存しているのです。

空路再びマウントハーゲンへ戻り、景勝地ワギ谷へ行き、アサロ族のマッドマン(泥人間)の踊りを見学しました。体中を泥で白く塗り、泥で作った仮面をつけて、死んだ人間が生き返ったと他の部族をおびえさせる伝統的な踊りなのですが、なぜかコミカルに思えてしまいました。



運よく遭えた極楽鳥

とはいえ、うっそうとしたジャングルの中で草の上を何十年も裸足で歩き続けてきたマッドマンからは、大地のうねりが伝わってきます。その後少し移動して、2つの部族による迫力満点の戦闘ショーを見ました。当然のことながら観客席などはなく、ともすれば目の前で行われている戦いに巻き込まれてしまいます。鼻に貝殻をつけたナムブ族など、部族ごとにひとつとして同じものが見られない特異な化粧は、もともと戦いの時、相手を威嚇するものであっただけにかかなりの迫力です。



泥で作った仮面と体中に泥を塗ったマッドマン



貝殻による特異な化粧のナムブ族



海辺の民の村

首都ポートモレスビーに到着後、タクシーに分乗して海辺の民の生活の様子を見に行きました。そして、午後からはロッジ近くのビーチでのんびりと過ごしました。翌日は、帰国の途につくまでの自由時間に、奇抜な形をした屋根の国立博物館やコキ・マーケットなどを観光しながら市内を散策。昼下がりの首都、思い思い集う黒色、中褐色、白褐色と異なった肌、髪の色の人々に出会う度、パプアニューギニアの起源

の不思議を感じてしまいました。

ご存知の通りパプアニューギニアは、第二次世界大戦当時の激戦地でもあったため、今だに数多くの戦跡が残っています。しかし、今は何もなかったかのように、美しい自然に囲まれ、陽気で明るいパプアの人々が私達を迎えてくれます。素朴な人々と大自然に会いに行ってみませんか。